岡の家

鈴木三重吉

岡の上に百姓（ひゃくしょう）のお家（うち）がありました。家がびんぼうで手つだいの人をやとうことも出来ないので、小さな男の子が、お父（とう）さんと一しょにはたらいていました。男の子は、まいにち野へ出たり、こくもつ小屋の中で仕事をしたりして、いちんちじゅう休みなくはたらきました。そして、夕方になるとやっと一時間だけ、かってにあそぶ時間をもらいました。

そのときには、男の子は、いつもきまって、もう一つうしろの岡の上へ出かけました。そこへ上（あが）ると、何十町か向うの岡の上に、金（きん）の窓のついたお家が見えました。男の子は、まいにち、そのきれいな窓を見にい

きました。窓はいつも、しばらくの間きらきらと、まぶしいほど光っています。そのうちに家の人が戸をしめると見えて、きゅうに、ひょいと光がきえます。そして、もう、ただのお家とちっともかわらなくなってしまいます。男の子は、日ぐれだから金の窓もしめるのだなと思って、じぶんもお家へかえって、牛乳とパンを食べて寝るのでした。

或日(あるひ)お父さんは、男の子をよんで、

「おまいはほんとによくはたらいておくれだ。そのごほうびに、きょうは一日おひまを上げるから、どこへでもいってお出(い)で。ただ、このおやすみは、神さまが

下さったのだということをわすれてはいけないよ。うかうかくらしてしまわないで、何かいいことをおぼえて来なければ。」と言いました。

男の子はたいそうよろこびました。では、今日（きょう）こそは、あの金の窓の家へいって見ようと思って、お母さまから、パンを一きれもらって、それをポケットにおしこんで出ていきました。

男の子にはたのしい遠足でした。はだしのまま歩いていくと、往来の白いほこりの上に足のあとがつきました。うしろをふりかえって見ると、じぶんの足あとがながくつづいています。足あとは、どこまでも

じぶんに、ついて来てくれるように見えました。それから、じぶんの影法師（かげぼうし）も、じぶんのするとおりに、一しょにおどり上ったり、走ったりしてついて来ました。男の子にはそれがゆかいでたまりませんでした。

　そのうちに、だんだんにおなかがすいて来ました。男の子は道ばたのいけがきのまえを流れている、小さな川のふちにすわって、パンを食べました。そして、すきとおった、きれいな水をすくって飲みました。それから、食べあましたかたいパンの皮は、小さくくだいて、あたりへふりまいておきました。そうしておけば、小鳥が来て食べます。これはお母さんからおそ

わったことでした。

　男の子はふたたびどんどん歩きました。そして、ようやくのことで、たかい、まっ青な、いつも見る岡の下へつきました。男の子はその岡を上っていきますと、れいのお家がありました。しかしそばへ来て見ると、そのお家の窓はただのガラス窓で、金などはどこにもはまってはいませんでした。男の子はすっかりあてがはずれたので、それこそ泣き出したいくらいにがっかりしました。

　と、お家からおばさんが出て来ました。そして何かご用ですかと、やさしく聞いてくれました。男の子は、

「私(わたし)は、うちの後(うしろ)の岡の上から見える、このお家の金の窓を見に来たのです。でも、そんな窓はなくて、ただガラスがはまっているだけですね。」と言いました。

おばさんは、くびをふって、

「私の家はびんぼうな百姓ですもの。金などが窓についているはずはありません。金よりもガラスの方があかるくていいんですよ。」

こう言って笑いながら、男の子を戸口の石だんにこしをかけさせて、お牛乳(ちち)を一ぱいと、パンを一きれもって来てくれました。おばさんは、それから、男の子とちょうどおない年ぐらいの女の子をよび出しました。

そして、二人であそびなさいというように、うなずいて見せて、ふたたびお家へはいって仕事をしました。
その小さな女の子も、じぶんとおなじように、はだしのままで、黒っ茶けた木綿（もめん）の上着（うわぎ）を着ていました。しかし、その髪の毛は、ちょうど、男の子がいつも見ている光った窓のように、きれいな金色をしていました。それから目は、ま昼の空のようにまっ青にすんでいました。
女の子は、にこにこしながら、男の子をさそって、お家の牛を見せてくれました。それは、ひたいに白い星のある、黒い小牛でした。男の子はじぶんのお家の、

四つ足の白い、栗の皮のような赤い色の牛のことを話しました。女の子は、そこいらになっているりんごを一つもいで、二人で食べました。二人はすっかりなかよしになりました。

男の子は、金の窓のことを女の子に話しました。女の子は、

「ええ、私もまいにち見ていますわ。でも、それは、あっちの方にあるんですよ。あなたはあべこべの方へ来たんですわ。」といいました。

「いらっしゃい。こっちへ来ると見えるのよ。」と、女の子はお家のそばの、すこしたかいところへ男の子を

つれていきました。そして、金の窓は見えるときがきまっているのだといいました。男の子は、ああきまっている、お日さまがはいるときに見えるのだと答えました。

二人は小だかいところへ上りました。女の子は、「ああ、今ちょうど見えます。ほら、ごらんなさい。」といいながら、向うの岡の方をゆびさしました。「ああ、あんなところにもある。」と男の子はびっくりして見入りました。しかし、よく見ると、それは岡の上のじぶんの家でした。男の子はびっくりして、私はもうお家へかえるといい出しました。そして、もう一

年もだいじにポケットにしまっていた、赤いすじが一すじはいった、白い、きれいな小さな石を、女の子にやりました。それから、とちの実を三つ、びろうどのようなつやのある、赤いのと、ぽちぽちのついたのと、牛乳のような白い色をしたのと、その三つをやりました。そして、またこんどくるからといって、おおいそぎで走ってかえりました。女の子は、男の子があわててかけてかえるのを、びっくりして見おくっていました。きらきらした夕日の中に、いつまでも立って見ていました。

男の子は、息をもやすめないで、どんどん走ってか

えりました。しかし道がずいぶんとおいのでお家へついたときには、もうすっかり暗くなっていました。

じぶんのお家の窓からは、ランプのあかりと、ろのたき火とが、黄色く赤く見えていました。ちょうど、さっき岡の上から見たときとおなじように、きれいにかがやいていました。男の子は、戸をあけてはいりました。お母さんは立って来て、頬（ほお）ずりをしてむかえました。小さな妹も、よちよちかけて来ました。お父さんはろのそばにすわったまま、にこにこしていました。お母さんは、

「どこへいって来たの？　おもしろかった？」と聞き

ました。

「ええ、ずいぶんゆかいでしたよ。」と男の子は、うれしそうにいいました。

「何かいいことをおぼえて来たかい？」とお父さんが聞きました。

「私は、じぶんたちのこのお家にも、金の窓がついているということをおそわって来ました。」と、男の子はこたえました。

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店
　　１９９６（平成８）年11月18日第1刷発行
底本の親本：「鈴木三重吉童話全集」文泉堂書店
　　１９７５（昭和50）年
初出：「赤い鳥」
　　１９２１（大正10）年12月
入力：鈴木厚司
校正：佳代子
２００４年1月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。